

詩集
第一

白檀弓

新涼會



新涼

與謝野鐵幹先生撰

○ 松原無葉

れふけなく幸さいちの和魂にぎたまがみ神かみに得とても

ろさいのちも歌うたにすみよき

濃こもき眉まゆに夏なつの雲くも呼よぶ男おとこの子こうた

妙義たうぎの神かみも來きて和わしたまへ

○ 福田紫雲

わかき子こに古ふるり詩しの譜ふをゆる

▲ 目 次 ▼

新	涼(短詩)……………	與謝野鐵幹選
星	夜(短詩)……………	新涼會詠草
狂	調(短詩)……………	互選十歌集
秋	思(短詩)……………	河野翠激
最近明星派の佳作	(評論)……………	黒蝶
鐵幹氏の新體歌	(評論)……………	嚶々
拜	啓(會告)……………	々

しては笑みうるはしき京の夏山きょうのあつやま

(旅せし翠激の君に)

○ 内田 枯竹

戀や詩や入れて教へて造られし
神のみわざの黄金ひかり戸

○ 近藤 月村

歌筆に眉のしめりはさてもあれ
砧音する更科の宿

○ 石橋 汐波

迷ひてしこゝしも興の世とおぼ

せ執る手ふたりの血は温き

○ 藏田 二葉

戯れかはたみなさけか味にがき

こし方たびて往にませし神

相寄りてうたふに幸は足りぬべ

し我に似る子をひとりたびつる

○ 河野 翠激

たゝかひのいた手負ひぬる朝よ

り我の價はうたがいそめし

みだれなば共にみだれてありぬ

べしおなじ淵瀬の花のいく片

星月夜

● 福田紫雲

もどめてぞいまこの園のみ戸に來し
百合も葵も戀の色なる
その詩にわらさかもひは封じつれ三
年名なきを戀にも泣かむ

羊追ひて野守二十の春去りぬこの夏
百合に歌はよばずや
今をこれミューズのたびしわが領か
うたに興知るこの野この川
こゝに見る出雲富岳の朝榮やみ神呼
ばむに先づ小手かさず
名よ榮よさては戀をも詩によびてミ
ューズこの子がみ母とよらむ
あちやがて歌の譜そらにおよびては
天津乙女の琴と和すべし

明石須磨は君がみ歌よ高からむみ影
追ふ子に秘めやすなゆめ

おぼしまに京の子召して詩きかせ夏
をうれしと笑みませし旅(以上二首、

旅せし翠激の君に)

● 松原無葉

君に得しうたみな神の譜に入りて今
を黄金のみ戸に立つわれ

オーシスに黒羽の蝶の夢いかに風は

毒さす亞弗利加の原

鶯に恥ぢつ蝴蝶にうらやみつ歌に琴

どる夜櫻の京

櫻淡紅人の國ともおもはへず歌に幸

見る霞濃き京

● 河野三星

人はこゝみながら歌とおぐる世に運

命はかなうやつれにし我

相見て予地のふたりの戀に笑めおこ

りの前に世は人もなき

ゆるせ君乞ひよびとめて野の小道何

をか今をかごとあるべき。

さくげむにはつ秋歌のみだれたり世
ゆゑの涙明あはに容れ賜へ（紫雲の君に）

● 石 橋 汐 波

青葉やがてそこにか蛇の夢あらむわ
が立つ石に百合も咲くべし

そいろなりやにがき宿世もくせのはく笑に
よる手いまこれ神を迎ふる

更けぬれば今かをはりの母呼びて消ひ
なむうつくに鐘まよふらし（終焉）

● 内 田 枯 竹

たはふれに手斧てあ下すも興ならめ

神はこの地のこの美にあさぬ

そより立つ山にしのぼりみ靈たまよびて
涙からすもまだ消えぬ子か

うごきなき岩も朝見る白百合に心あ
らずや雲低うなる

弟にせめては涙わかつべし來し世い
くとせ戀なりし我

● 近 藤 月 村

み手によりてとはの歎きをまよひた
れ音に泣く世とも人のゆるさぬ

とほろぎの聲のかるくも運命なり森
の朝雨世に新らしき

おばしちの袖のうらやみ月の宵ふた
りし更に足るをもとめじ

● 井上三江

夜よほどてしら蓮月にみ手をよぶ里
ひと夏の旅はやすけき

野にちさき千草が花も時し得てみ胸

に住まむ機もあるべき

● 永田岡仙

日ぐらしの夕日か岡はうらぶれてか
へり來む日の魂に似るべき

おごりなりどろくてしあらば、やら
じみ袖欄のはつ秋おもひはせざる

● 藏田二葉

額わけて笑はば笑ひべき世やいづこ
人をたのみて身はおどろへぬ

交はりて名乗らば世には弱がらめみ

手たははりて花にうたはむ

● 狩野梅南

禱る子よまたく罪はたびけらしか
ろきにあふぐ新星の影

園は朝しろき薔薇よそとよりて露の
きよきに口づけて見し

緋房ながき京の團扇のされ歌や李白
が興を讚へにし宵

● 河野翠漱

袖かして抱くに友の頬をもゆるあゝ

こゝにして裸々の子を見る

いくたびを神はわれ將てはどはする

友はゆく手に花かざしたり

兒が眠覺めぬと見るに得く笑みてや

た床安う夢に入る幸

かのづから世には落ける魂ならぬ戀

ふ子に星もかもしあるらし

なになれば地のおそれに堪へやらぬ

詩にのみこそ遠き世と戀へ

み手にしもわが世の幸を強ひまつり

わりなく戀ふる身とぞなりぬる
 のぞみ消え光りうすらぎ春過ぎぬわ
 が世の歌はいづちに問はむ
 人丸の歌の昔しもおもしうし石見の
 旅を師に強ひまつる（鐵幹氏にとて）
 ゆくにいづ間とおそれぬめしひ盲目なり誰
 が手ふれてか神への往いなむ

狂 調（互選十歌集）

第一回互選十歌集は、出詠者七人選者六人總
 歌數七十首にして、七月廿六日本部を發し八
 月十三日歸着、その間絶ゆる各選者の詩眼を
 煩はせり。今その結果を左に記載せむ。

二十一點	松●原●無●葉
十四點	河●野●翠●激
十三點	藏●田●二●葉
十點	内●田●枯●竹

十 點
八 點
二 點

福田紫雲
河野三星
近藤月村

▲ 天 藏田二葉

みなさげかさらばみ聖旨かたはふれ
かこし方たびて去にませし神

▲ 地 内田枯竹

向日葵に宿世の百合は嫁ぐべし夏は
半途を駒に進めぬ

▲ 人 松原無葉

雲凝りし雪のたけびの宵おもり燈火
古代の光明かと思

佳 調

▲ 河野翠激

こし方の運命の世にも興ありしたび
ける袖に罪もありにし
もてまいる牡丹が晝の三絃にむとし
き香てる筆によつはれ

▲ 松原無葉

かふけなく幸の和魂神にむて人もろ
き世も梅にすみよき

誦ずるに春を雲よぶ男の子うた妙義
あるひは近く和すべし

▲ 藏田 二葉

相寄りてうたはば幸は足りぬべしわ
れに似る子はひとりたまひし

世を泣けどみての眞珠につくられて
賜ひし涙よ人にゆるさじ

▲ 福田 紫雲

うた秘めてみ殿まかりし今宵わかも
だぬしろさば額断ちたまへ

妻を子をこゝに泣かせてたゞひとり
黄泉路さびしう杖による君

▲ 近藤 月村

花賣の翁朝々背に負ひて、市路の幸
を孫による紅

▲ 河野 三星

歌ならでみ堂すべりし月の宵詩才を
たまたま罪を買ひたる

秋思

河野翠激

世よの秋あきのさむき風かぜにもふとすればお
どろかれぬるけふのわが身みや

ひとたびはみ膝ひざによせてみをしへの
たゞ一言ひとこともたびはせよとぞ

このこなればみ肩かたの瘦やせはいたはらひ
わが行ゆく道みちに慰藉あぐさめはたべ

語かたらうに人ひとのちさきを秋あきに病やめれば
はぬ集しづのれごりもあらぬ

にがしとて花はなにもわれと去さりし日ひや
あるとき蜜みつの香かに酔よひし日ひや

地におどり天に桂の幸を呼びて眞白
さわれの世とはなるもの

花の香にかのづと蝶はよるものぞさ
て神よふに足らぬ詩の魂

いれられぬ世をほたこくにはぐれぬ
るさて神なきにみたひ歸れどや

ふと見るに眞白くれなる彩羽榮へて
花の高さに夢とよる蝶

微草の尺に生ひてし園の秋ひとり
友と戸によるや君

ひとつ矢にふたりしかこつ傷手なら
ば夕戸にぐるに神はよばじな

こもりては艸の戸さらに世もあらぬ
ひねもす秋を筆に呼ぶ子や

美しくう袂に笑のうら若し榮の冠に
君いつかへる

霜白うあした柳の橋さむし送るひと
りに涙なからめや

(以上二首、人を送る歌)

詩と戀のなうれ秋思の胸に満て、に
がささだめよ破れては去れ

○ 紫田 逝秋

美はしき園のひとりどまよひこして
くにす薔薇の香はおぼわつれ
秋の野にひとり友とよるを小草、
われにも似けむ名のなき小草

附録

最近明星派の佳作

黒蝶

月毎に、年毎に、進歩の路の見ゆるは、「明星」の和歌なるべし。余がこゝに摘抄するところのもの、本年九月夏季特別刊行の「明星」に出でたる社友の什なり、孰れか金玉の

作○な○ら○ざ○ら○む○、
抛○た○は○將○に○、
憂○と○し○て○地○上○よ○
響○あ○ら○ん○ま○こ○と○に○
日○本○歌○壇○獨○歩○の○詩○と○い○ふ○
べし。

○ 奥謝野晶子

かへりみれば君やかもひし身をやめでし
戀は驕りゝ添ひて燃わし火

さびしみの「秋」なる宮の新まゐり萩と
も咲かぬ髪ほろと人

天にひとり御手の桂の金色の彼のかん方
や君やこの子や

棲みて三どせ後は百どせ中のひと日犠牲に
 よたまへど來しや寂寥さびしみ

少女なりどひくうも云ひぬ或るひと日天
 なる名さへ呼びも見し人

○ 大井 蒼 梧

おほ神の劇詩かなかの添人と美くしうて
 ろ行かめ地の旅

○ 松 永 清 亂

大八しよ生まむと神が來し海の春潮のこ
 どなさけは稚しわか

わが魂が陰府よみの鏡にうつりたる影のさよ
 して悲哀は來る

○ 高 野 常 春

花見れば香あり蟬には彩羽あり詩は執す
 れどたいにさびしさ

○ 時 任 直 章

おほ夏の足る日の戀にめざめてはやはゆ
 くめぐる黄金ひぐるま

○ 伊 藤 只 聽

松島や海の女神が夜宴よみの帳どのこる青の

鐵幹氏の新體歌 嚶々

與謝野鐵幹氏、近比新體の和歌を試ひ、舊來の歌に二字を加へ五七七七七とせるもの。これ等の詩体、また研究に値すと信ず。而して全氏はこれを『明星』誌上に掲げて、絶句二十五首、かたわ車」と題す。今二三を載せむ。

天みれば黄金星の夜成るや、此の時眞珠

は海に歌はみ胸に。

鴿のごと白きひかりや、ゆるせ少時、ね

もふは今よ君がまぼろし。

わゝ今は消ゆる花夢、寒き沈黙に、古り

しみ堂の像のごと寝む。

君が詩よ火焰の疾風、戀に羽搏てば、あ

るや捲かれて我もむせびぬ。

紅梅が繙ひし花笠、内に誰ぞ在る、君に

よく似し王子うくひす。

予輩は徒々に、新奇を愛づるものに非らずと、

雖ども、而かも、前數首の、よく内容と外形
 と相調和して、剩なく贅なく、將に一字の改
 心べきなきをねもひ、竊かに以て、將來の詩
 風に想ひ及ばずんばならず。多望なる哉、詩
 の前途、遼遠なる哉、われ等研鑽の行路。
 乞ふ、會員諸子、庶幾くば相俱に、これを勉
 めむ。

拜啓 (會告)

かねて諸君に相諮り置候詩集公刊の件、漸
 やく、不完全ながらも第一集を印刷に附し申
 候。固より、事々の際に属し候まゝ諸君の
 意に満たざるところも多々可有之候へ共、特
 に寛恕あらんと希望致候。

第二集は又々近く發行する計畫に有之、何
 れ前以つて尙諸君の高見拜聽可致候。

現に會員名簿に登錄せし諸君のうち、更に

御出詠なきが有之、整理上に於いても面白からず候まゝ、是非近什二三御示し被下度候。

■今回詩集刊行について特に御寄稿被下候ものうち紙面の都合により掲載を見合せし分
二三有之候處、これ等は第二集へ相廻し候間
左様御承知切に諒恕を乞ひ申候。

■本會の趣旨を貫徹せしむる爲め、會員誘導の件は、特に諸君の御盡力を仰度候。

■本會詠草は主として「濱田新報」に掲載致居、創立の際の如きは全社より少からぬ便利を

與へられ候處、故あつて、その後「島根新報」に掲ぐるごとく相成候。小生は特に島根新報社の同情と激勵とを感謝致候。こゝに両新聞社に對し高謝の意を表し申候。

■本集は實費として金五錢を申受くべく候。印刷高少數の爲め比較的高價と相成り候段申譯無之候。

■金貳拾錢也會員某君の高贈を辱うし感激此事に御座候。

■本會清規は都合により本集に掲載致さず候

まゝ左様御承知被下度、何れ序でを以て送附
 することゝ可致候。



明治三十六年九月二十日印刷
 明治三十六年拾月十日發行

島根縣邑智郡田所村大字下田所七世二番地

編輯兼
 發行老

河野岩雄

島根縣那賀郡濱田町大字原井六三十四番地

印刷人 福本善吉

島根縣那賀郡濱田町大字新町一番地

印刷所 濱田活版所

發行所

新涼會